

水が語るもの



表六甲河川

阪神間の繁栄をともした諸河川

川シリーズ



水ものがたり

世界の川と水インフラ(2) -メコン河-

世界の水

水辺空間を生かした都市再生の事例
-ヨーロッパ(その4)-

近畿の水

名橋 -第6回-

水と文学

歴史と名作の舞台 紀の川、吉野川

100年ぶりに明らかとなった旧瀬田川洗堰の秘密

由良川水害の歴史と防災対策(2)

うおーたーなっと

水都大阪と幻の大阪万国技館(3)

トピックス

「行基に学ぶ関西再発見の会」 (通称「行基鍋」)の活動報告

行基(668~749)は、前号でも紹介しましたが、奈良時代の高僧で東大寺を始めとする多くの寺院の造営に関わっただけでなく、溜池、橋、堤防・樋門などの地域開発事業を畿内一円で広く実施したことにより、当時の民衆から菩薩と慕われていました。

も寄り合って鍋をつつくような活動であるため「行基鍋」と称されています。
第二回会合

昨年8月の発足会に続き、平城宮跡歴史公園整備の一貫として建築された「平城宮いざない館」で約150人の参加のもと、5月26日に第二回の会合が開催されました。この会合では、東大寺の狭川宗玄長老と唐招提寺の西山明彦長老による行基の素晴らしさを紹介するご挨拶のあと、行基鍋会長任命式と、活動報告「行基を訪ねる」や活動提案「行基に肖る」の報告が行われました。

◆行基鍋会長任命式

この会は、メンバーの自主的な活動の連携などの場とされているため会長は置かれていませんでしたが、活動を強化するための象徴として会長が任命されました。驚いたことに会長には、唐招提寺に安置されている行基座像(国宝)が任命されました。前日の唐招提寺での任命式後、当日会場には喜光寺のレプリカ座像に代理で出席いただきました。

◆活動報告「行基を訪ねる」

行基ゆかりの土地での各会員より、活動報告が行われました。

①当時の多くの人々の協力で建立された「塚の土塔」に関する活動(近畿大学 近藤康司講師)



②民衆の困窮を救った行基の福祉活動(久修園院 佐伯俊源住職)

③行基が関連した狭山池に対する地域の感謝の伝承(奈良大学 小山田宏一 教授)

④伊丹市における行基の遺産と保護活動(伊丹市教育委員会事務局 中畔 明日香氏)

⑤現在の清滝生駒道路と「行基の道」の関連(近畿地方整備局 浪速国道事務所 古川慎治所長)

⑥地質から見た東大寺の立地の最適性(近畿社会インフラ研究会 持田亮氏)

などの報告が行われました。さらに、唐招提寺の石田太一 副執事長と喜光寺の高次喜勝副住職による行基の事業と考えに関するトークショーの中で、行基の民衆によった一貫した姿勢が語られました。

◆活動提案「行基に肖る」

行基の活動に造詣が深い尾田栄章氏

を座長として、今後の活動提案についてパネルディスカッションが行われました。

パネリストからの報告として、

①在日本大韓民国民団 奈良県生駒支部 金潤哲支団長による、行基に因んだ多文化交流や、行基の墓所がある生駒市竹林寺での地元活動

②伊丹市教育委員会事務局 中畔氏による、昆陽池の地理的条件や地元での行基の伝承と活動

③近畿地方整備局 井上智夫企画部長による、当時の国土条件や社会システムなどに注目しながら行基の思いを継いだ社会事業を広く知ってもらうため、現存施設を巡るインフラツーリズム(秋に3コースで実施予定)

④喜光寺高次副住職による、当時の飛火野での行基集団数千人の集会を再現する「行基さん大感謝祭」(10月20日実施予定)

など、今後の企画が紹介されました。

会場からは、木津川市長による行基関連の恭仁京の紹介、地元ボランティア 森妙子氏から行基の墓所がある竹林寺での活動、産経新聞と中外日報からの活動紹介などが行われました。尾田座長からは、現在も機能を發揮している、行基関連の溜池の世界遺産登録を目指す活動提案などが行われました。最後に、近畿地方整備局長 池田豊人氏からの挨拶があり、盛況のうちに幕が閉じられました。活動の詳細と今後の予定については、Facebook ページ「行基に学ぶ 関西再発見の会」をご参照ください。



本誌は、近畿の「道の駅」、一部の府県および公共施設などに配布しています。
インターネット環境をお持ちの場合は、<http://www.kc-center.co.jp/suishitsu/> においても最新号とバックナンバーをご覧になれます。
誠に申し訳ございませんが、バックナンバーの配布は行っておりませんので、ご了承ください。

水が語るもの

第16号 平成30年6月発行(年2回発行)

一般社団法人近畿建設協会 技術部
編集・発行
〒540-6591 大阪市中央区大手前 1-7-31 OMM 13F
TEL 06-6941-3413 FAX 06-6910-5953
URL <http://www.kyokai-kinki.or.jp>

「水が語るもの」はインターネットでもご覧になれます。
<http://www.kc-center.co.jp/suishitsu/>

水が語るもの 検索



植物油インキを使用しています。
この印刷物は再生可能な紙を使用しております。

水が語るもの

表紙写真

兵庫県西宮市大浜町
「夙川河口 葦原橋より甲山方面を望む」



目次

水ものがたり
世界の川と水インフラ(2) -メコン河-

京都大学名誉教授
(公財)河川財団研究フェロー 池淵 周一

川シリーズ
阪神間の繁栄をともにした諸河川 表六甲河川

世界の水
水辺空間を生かした都市再生の事例 -ヨーロッパ(その4)-

一般社団法人 近畿建設協会・技術顧問
元大阪産業大学教授 中野 雅弘

近畿の水
名橋 -第6回-

水と文学
歴史と名作の舞台 紀の川、吉野川

評論家・文化プロデューサー 河内 厚郎

100年ぶりに明らかとなった
旧瀬田川洗堰の秘密

近畿地方整備局 淀川河川事務所 調査課長
(前)近畿地方整備局 琵琶湖河川事務所 調査課長 森田 一彦

由良川水害の歴史と防災対策(2)

舞鶴工業高等専門学校 名誉教授
(株)東京建設コンサルタント関西本社 顧問 川合 茂

うおーたーねっと
水都大阪と幻の大阪大国技館(8)

水都の会 城北川プロジェクト 代表 藤井 薫

トピックス

「行基に学ぶ関西再発見の会」(通称「行基鍋」)の活動報告



今号では、宮井 宏 博士の「南山城大水害」はお休みいただき「100年ぶりに明らかとなった旧瀬田川洗堰の秘密」を掲載しました。「南山城大水害」の続きは次号に掲載の予定です。

水ものがたり

世界の川とメコン河 水インフラ(2)

京都大学名誉教授
(公財)河川財団研究フェロー
池淵 周一



メコン河、その流域と川の流れ
メコン河は標高4,968mにあるチベット高原の湿地を源流とし、中国領内を流れる間は瀾滄江とよばれるが、その後ミャンマー、ラオス、タイ、カンボジアを経て、ベトナムへ流下、最終的には南シナ海に注ぐ。概ね北から南に流れている。6カ国を流れていることから、いわゆる国際河川である。

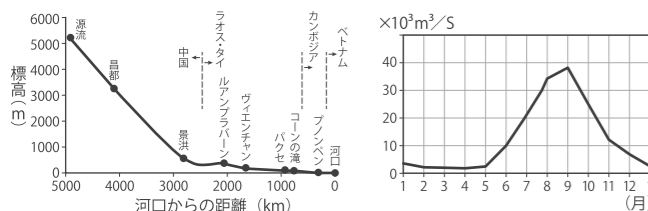
流域面積は約80万km²、本川流路長は約4,800kmである。図1は6カ国と、そのメコン流域、そこを流れる本川と支川・湖、主要都市及び主要ダム位置を示したものである。上流域は急峻な山岳域が遍っており、流域幅が狭く、下流域が広がった柄杓状の流域形状をしている。図1・2は河川縦断を概略示したものである。中国、ミャンマー国境付近の標高差は約4,600m、流路延長

長2,000kmを考えると、この河川区間はかなり急勾配である。ラオスとカンボジアの国境付近に落差30m近いコーンの滝がある。そこを過ぎてトンレサップ湖と繋がるトンレサップ川がメコン本川に合流するあたりから下流は勾配が極めて緩くなり、メコンデルタを構成する。

メコンは国と国を分けている。タイとラオスの国境を流れるメコンの東側は山地、西側にはコラート平原(標高100mから200mほどの起伏のない平原)が広がり、ラオスの東側は2,000mを超える安南山脈が聳え立ち、ベトナムとの国境になる。ところで流域6カ国ではラオスとカンボジアは、国土面積のうち約85%がメコン流域に属しており、ついでタイ、ベトナムがそれぞれ35%、20%、中国は1・7%である。流域内人口は推定であるが、6,500万人、そのうちタイが2,500万人、ベトナム2,200万人、カン



図一 メコン河流域



図二 メコンの河床縦断面図

図三 月平均流量でみた流況

ボジア1,000万人、ラオス、中国がいずれも400万人程度である。気候的には、最上流域は冷帯気候、下流に行くにしたがって温暖湿潤気候、サバンナ気候、さらには一部熱帯気候と多様である。流域年平均降水量は1,672mmで、地域の差はあっても4月から10月までの雨季と11月から3月までの乾季がはっきりしている。乾季流況にあつては上流部中国の高山域からの融雪水が大きく寄与している一方、年平均流量や年最大流量にはラオスの安南山脈などに降ったモンスーン地形性降雨が大きく寄与しており、こうした雨季と乾季での河川流況(図3)は下流クラチエ地点で12m近い大きな河川水位変動をもたらしている。こうした雨季と乾季の水位差は河道の露出岩や砂州とあわせ、乾季には航行の障害となっており、加えてコーンの大滝がメコン上下流の航行障害になっている。下流クラチエ地点(流域面積65万km²)での年総流量は4,110億トンで、世界で10番目の流量規模である。なお、洪水にあつてはメコン本川チェンセンからポン

ペンまでの2,000kmを洪水が10



バウムダム（パウムダム）の魚道

4万haと広い。バウムダムは中規模貯水池であるが、漁業者や住民から強い反対にあり、建設でもめたダムである。

パペーン滝の直上流に高さ5mほどの堰を、ソムパミット滝近傍の天然の余水吐部分に低いダムを設けることによって、落差30mの発電と発電所近くに舟航用閘門を設けるというコーン瀑布利用計画があるが、その実現には至っていない。中国が触手をうごかしているとのこと。

東北タイ、大支流で進む灌漑・水力開発

ムン川・チー川はタイ東北部のコーン平原を流下し、メコン河に流入する最大支流である。流域面積は合わせて約12万km²で、メコン河流域の約15%を占めている。この流域には、貯水量が1億トン以上の大規模貯水池が10基、100万トン以上の中規模貯水池が150基もある。シリントーンダムは堤高42m、堤長940m、貯水池面積288km²、平均水深3m、貯水容量約20億トン、発電設備容量3.6万kwで、このダムの受益地は2.4万haと広い。バウムダムは中規模貯水池であるが、漁業者や住民から強い反対にあり、建設でもめたダムである。

林を伐採してのゴム園などが広がっている。デルタでは漁業生産が盛んで、養殖生産の占める割合が大きい。

東南アジア最大の淡水湖、トンレサップ湖

トンレサップ湖はカンボジアのほぼ中央に位置する湖面積約2,700km²（琵琶湖の4倍）の東南アジア最大の淡水湖である。雨季になると唯一の流出河川トンレサップ川をメコンの水が逆流し、湖面積は10,000km²にもなる。この巨大遊水池作用は洪水調節として下流デルタにおける水位の上昇速度を緩和し、流量自体も本川流量を約10%低減させるといわれている。また乾季には雨季にトンレサップ湖に流入し、貯留された水がトンレサップ川に流出し、下流の本川流量を高め、下流デルタの灌漑供給や舟運に必要な水を補完するとともに、塩水遡上を抑



イラワジカワイルカの壁画

ムン川がメコン本川に合流する地点から数キロ上流にパーテム国立公園がある。絶壁には3,000年前の壁画がある。メコンオオナマズやイラワジカワイルカなどが描かれており、メコン本川の豊かな水資源の恩恵を受けていた証拠である。

河川堤防はほとんどが自然堤防で、沿川の都市部で一部、護岸堤防やコンクリート特殊堤防が見られる。河岸近くに建つ住居はほとんど高床式である。ただ、メコンデルタにあつては雨季に広大な面積が浸水し、湛水期間も何ヶ月も続き、氾濫原管理が課題である。

メコン上流、瀾滄江と水力開発

中国領内のメコンは瀾滄江という。大理の上流に琵琶湖と大きくも同じ断層湖、洱海がある。この洱海には長江水系のヤンピー川からの導水があり、長江とメコンを繋いでいる。

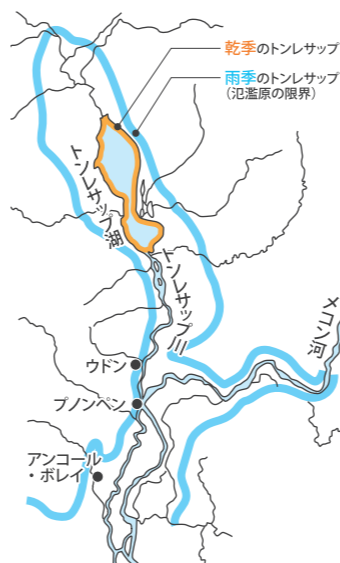
瀾滄江にはチベット高原の雪解け水と雲南省内に降る雨が合わさり、流量は豊富で、さらに河川勾配が急

制する効果もある。加えて、トンレサップ湖には約35万人が湖水に浮かぶ家に住み、そこには学校、ガソリンスタンド、スーパー、医院もある。4500人近い漁業者がおり、漁業に勤しんでいる。年間漁獲量が5万トンと、きわめて高い生産力を誇っており、その漁獲は人々にとって重要なタンパク供給源になっている。

シェリムアップ川とアンコール遺跡群

シェリムアップ川はトンレサップ湖に流入する河川の一つである。クレン山に源流をもつシェリムアップ川が遺跡の間を流れ、パライとよばれる農業用灌漑人造湖の水源ともなり、遺跡周囲に張り巡らされた運河水路で環濠を形づくっている。これらパライと給水用運河網によって集約的な農業が可能となり、クメール人によるアンコール文明が発展した。

9世紀以来500年余にわたり栄光をきわめたアンコール文明もその築き上げた巨大石造建造物ともども熱帯林の深みに埋もれたが、ようやく19世紀末、フランス人によつ



乾季・雨季のトンレサップ※

であることや、この地域の人口が多くないことなどもあつて、水力開発に有利な条件がある。

中国はこの地に15余の連続した水力発電計画をたて、漫湾ダム（総貯水量9・2億トン、発電設備容量150万kw）を皮切りに、その直下流に大潮山ダム、小湾ダム、景洪ダムを完成、運用している。また2015年には最大規模の糯扎渡ダム（総貯水量246・7億トン、発電設備容量550万kw）を完成させている。最上流の水力発電ダム群による流況、流砂の変化はメコン下流のそれらに、また生態環境にどのような影響を及ぼすのであろうか。最近、ベトナムとの間で3月15日から4月10日まで毎秒20トン余の水をダムから放流するという25日契約を結んでいる。

ラオス国、支流に並ぶ水力発電所群

メコンはラオス国のほぼ真ん中を流れる。東部安南山脈は降雨量が多く、メコン本川に注ぐ左支川の流量は大きく、落差もあり発電ポテンシャルは高い。ラオス国政府はこうした支川にカスケード状に水力発電開発を進め、一部は自国内に供給す

るが、多くはタイなど周辺国に売電出力輸出を国策に掲げている。すでに30有余の発電所が稼動しており、なかでも日本企業が主体となつて進めているナムニアップ1水力発電事業は主ダムの高さ150m、有効貯水量12億トンとラオス国内で最大級の規模をもつ。

本流に沿つての連続ダム群開発計画

メコン委員会は国際河川メコン河下流域の水資源開発計画の立案と調査、調整、監理を目的に、1957年タイ、ベトナム、カンボジア、ラオス4カ国で設立（ミャンマー、中国はオブザーバーの立場、本流の開発にあつては原則、流域国間の合意が必要として連続ダム群開発計画をたてたが、その後のこの地域の政治状況や体制の変化、社会・経済状況の変化などともあいまって利害関係も強くなり、本流でのダム開発はどれ一つ実現に至っていない。ただ、この本流案の中で、最も規模の小さいサヤブリダム（堤高約53m、総貯水量1億トン、発電設備容量90万kw）が最近動きだした。8年後に完成すれば、中国以外でのメコン本流の最初のダムになる。



コーンの大滝

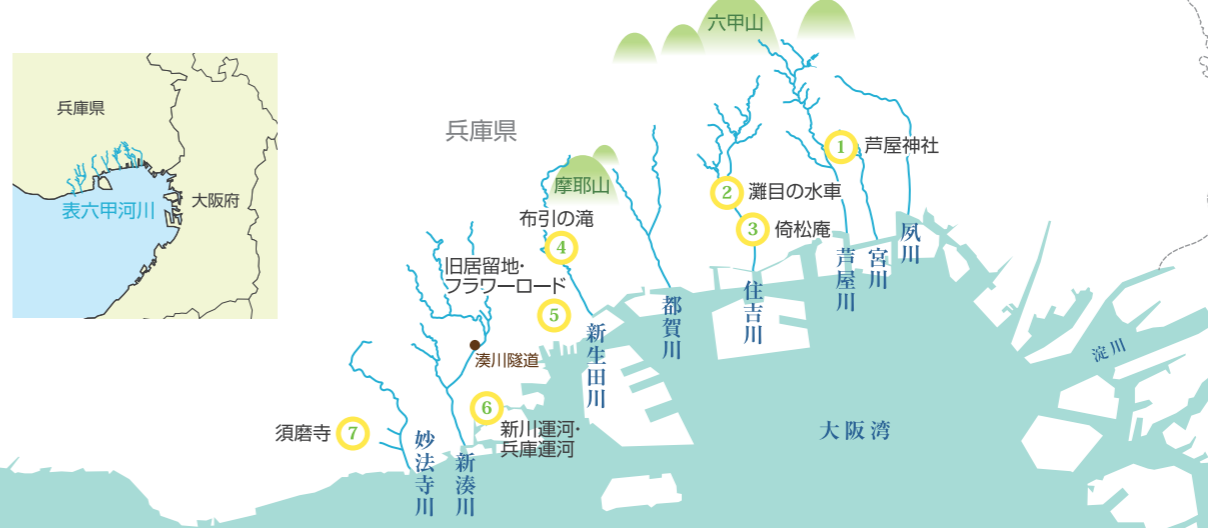
て再発見された。アンコール遺跡群の保全・修復事業が進んでいる。

落差30mのコーンの大滝

メコン本川で30m近くの落差をもつ箇所がある。ラオスとカンボジアの国境付近で、この地に横たわるのがコーン大滝である。古くからこの滝が上下流の舟運や人々の行き来を拒んできた。コーンの大滝は10数kmの連続した急流区間を指すが、そこには複数の瀑布群がある。なかでも東端にあるパペーン滝や西端のソムパミット滝が見応えがある。パペーン滝は幅300m、落差30mで、このあたりのメコン河の水量が乾季で毎秒70,000トン、雨季で毎秒90,000トン流れるとのことと、その水量が激流として落下する様は迫力満点である。

表六甲河川

「おもてろっこうかせん」



表六甲河川は六甲山地を源とし、大阪湾に流入する河川の総称です。東は西宮市を流れる東川から、西は神戸市を流れる山田川まで、26水系がこれに該当します。合計の流域面積は約160km²で、神戸市の面積は約2割にあたります。代表的な河川は、夙川(西宮市)、芦屋川(芦屋市)、住吉川、都賀川、新生田川、新湊川、妙法寺川(いずれも神戸市)などです。六甲山地から流出した土砂で形成された扇状地を急勾配で流れています。この急な流れを活かし、さまざまな産業が発展しました。

この地域は、縄文時代以前からの人間居住の跡が各地にみられます。歴史の舞台に登場するのは、奈良時代の高僧行基によって築造された港・大輪田の泊、平安時代末期の平清盛による福原遷都などです。特に幕末の神戸開港や、その後の阪神間の鉄道開通により、産業の地や住宅地として大きく発展し今日に至っています。



布引の滝の一つ 雄滝

4 布引貯水池

生田川上流に、神戸市民の水源の1つである布引貯水池があります。明治時代にコレラなどの発生防止のために、近代的な水道の整備が必要になり、その水源として1900(明治33)年に完成しました。貯水池を形成している布引五本松堰堤は日本最初の水道専用ダムで、118年経過した現在も良好な状態で使用されており、国の重要文化財に指定されている現役の水道施設です。

布引貯水池へ行く途中、4つの滝からなる布引の滝(雌滝・鼓滝・夫婦滝・雄滝)が現れます。この滝は、那智の滝、華厳の滝と並んで日本の三大神滝と呼ばれ、平安時代から貴族や文人などが訪れて多くの和歌を残しています。



旧居留地15番館

5 旧居留地・フラワーロード

1867(慶応3)年に兵庫が開港され、これ以降神戸が日本を代表する港町として発展してきました。開港にともない現在の神戸市役所の南側に居留地を建設。ヨーロッパの都市計画にならぬ西洋風に造られ、当時の英字新聞に「東洋における居留地として最もよく設計された」と高く評価され、現在もその雰囲気を残しています。また、居留地には横浜と並んで日本最初の近代下水道が整備され「旧居留地15番館」の横で当時のレンガ製の遺構を見ることができます。



当時の生田川は頻りに氾濫を繰り返し、下流にあった居留地の住民から洪水対策を強く求められ、1871(明治4)年に現在の場所に付け替えられました。旧生田川は、その後埋め立てられフラワーロードになりました。



兵庫運河

6 新川運河・兵庫運河

和田岬の北側、新湊川の河口付近にある新川運河と兵庫運河は明治時代に造られました。この場所は元々、奈良時代の高僧であった行基によって大輪田の泊が造られた場所です。その頃から交易によって栄えた港でしたが、波の荒い和田岬をまわって入港する不便さがありました。この問題を解消するため、1876(明治9)年に神田兵右衛門(後の神戸市議会議長)によって新川運河が造られ、1899(明治32)年に八尾善四郎(神戸市議会議員)によって兵庫運河が完成しました。



妙法寺川が流れている須磨の地は、平安時代に紫式部によって書かれた「源氏物語(須磨の巻)」や、古今和歌集に詠まれた和歌の舞台として当時から有名でした。平安時代末期には、一の谷の合戦など源平の争いの舞台にもなり、この地域には多くの史跡があります。中でも須磨寺には源平に関する宝物が保管されており、源平ゆかりの寺としてよく知られています。平教盛と熊谷直実の一騎討ちの姿が再現された源平の庭や、宝物館には教盛が身につけていたという愛用の青葉の笛、教盛の木像などが一般公開されています。



7 須磨寺



2 表六甲河川の水車



復元された水車の1つ(灘目の水車)

表六甲河川の急な流れを利用して、江戸時代中期から水車産業が発展していました。住吉川や都賀川の流域に多くの水車小屋が建ち並び、菜種油の油絞、酒造の精米、素麺の製粉などの動力として活用されました。都賀川流域には「水車のお宮さん」と呼ばれる大土神社も建立されています。

その後、水車は時代の流れと共に姿を消しましたが活躍の歴史を伝えるため、そのいくつかが復元されています。



1 芦屋神社(水神社)



昔から生活のための用水や、田畑の灌漑用水の確保は大きな問題でした。芦屋川の流域は河川の恵みを受け、江戸時代には農村地帯として発展しましたが、洪水の他に水不足も深刻な問題でした。このため、水についての争いが起こり雨乞いの習慣が生まれました。

現在も雨乞いの民話や、それにまつわる弁天岩・フカ切り岩などが残っており、これらに関係する水神社が芦屋神社の中に祭られています。



3 倚松庵(谷崎潤一郎旧邸)



谷崎潤一郎は阪神間の温暖な気候が気に入り、大正12年以来この地域で十数回も転居しています。小説「細雪」は昭和11年から16年まで住んだこの家での出来事を、ほぼ忠実にたどったものといわれ建物や部屋の様子が作品の中に描かれています。昭和13年、この家で阪神大水害に遭遇し被害は免れましたが、当時の資料に基づき水害の様子が生々しく描写されています。「倚松庵」の庵号は、松子夫人の名前に因んだものです。

当時は、現在の六甲ライナー魚崎駅付近にありましたが、同交通の工事に伴い住吉川沿いの少し上流に移設・保存されています。



昭和13年 昭和42年7月
阪神大水害と豪雨災害

表六甲の河川は、いずれも、六甲山
地から流出した土砂で形成された扇状
地を急勾配で流れています。このため、
大昔の人の居住が少ない時代には、河
川はこの扇状地の上を自由に流れ、流
路を頻繁に変えていたと推測されま
す。現在の阪神間の市街地の多くは、
この扇状地に立地しています。この
地域は、地形が急峻であるため大雨
の時には鉄砲水となり、山崩れを伴っ
た災害が発生しやすくなっています。
過去には、何回もの水害に見舞われ
ていますが、代表的なものは、1938
(昭和13)年の阪神大水害です。

昭和13年 阪神大水害

阪神大水害では、都市の急速な発
展に治水整備が追い付かず、大きな
被害が発生しました。梅雨前線によ
る豪雨は、7月3日～5日の3日間
で461・8mm、時間最大60・8mm
に達し、これによって六甲山地で土
砂崩壊が発生し、市街地に土砂や流
木が流れ込み、一面泥の海になり、
死者695人、被災家屋約11万戸に
上りました。

特に、神戸市の中心部を流れてい
た新生田川の被害は大きく、その原
因は、大正14年の河川の暗渠化によ



三ノ宮駅前の阪神大水害の惨状

り断面積が縮小され、土砂や流木に
よりこの暗渠の入り口が閉塞された
ため、土砂を含んだ洪水が河川を流
れることができず、下流の市街地一
面に氾濫したことです。

他の河川でも、同様に、流出した土
砂や流木による河川の溢水が主な原
因です。この大水害を契機に、国が直
接砂防工事をするようになりました。
〔細雪〕(谷崎潤一郎)における
阪神大水害の描写

当時、作家の谷崎潤一郎は、住吉
川沿いに住んでいて、小説「細雪」
の中で、阪神大水害を描写していま
す。「細雪」は、裕福な家庭に生ま
れた4人姉妹の物語ですが、その中
で、この災害を四女の人生の転機と
して記述されています。災害の描写
は、詳細に書かれていますが、「六

湊川隧道

会下山トンネル

湊川隧道は河川のトンネル
で、湊川が六甲山地から平野部
に流下し西に流れを変える湊川
公園付近にあります。明治初期
には、平野部をほぼ南東に流れ
ていましたが、天井川のため洪
水の危険が高いことと、市街地を分
断しているため、流路の変更が検討
されました。1896(明治29)年

の台風による市街地の大被害を機
に、会下山にトンネルを建設し西に
流路を変更、菟藻川と合流させる工
事が開始され、1901(明治34)
年に新湊川として完成しました。こ
れ以前の河川を旧湊川と呼んでい
て、この流路跡は現在の新開地商店
街になり地域の繁栄を支えています。
また湊川流域には、平安時代末
期に平清盛が造営した福原京が位置
しており、この当時は古湊川と呼ば
れ旧湊川の西の流路を
流れていました。湊川
は3つの流路を変遷し
たこととなります。

旧湊川から新湊川へ
の流路変更の際、会下
山に建設されたものが
湊川隧道で、20世紀初
めのトンネルとしては



現在の湊川トンネルの呑口



隧道内コンサート (アコースティックギター HATABO)

世界最大級です。その後、1995
(平成7)年の阪神・淡路大震災に
よりトンネルが大きな被害を受け、
2000(平成12)年に完成した新
しいトンネルに役目を譲り、現在は
近代土木遺産として保存されてい
ます。
旧トンネルを活用して、ボラン
ティア組織の「湊川隧道保存友の会」
により定期的な一般公開やミニコン
サートが開催されています。



甲の山奥から溢れ出した山津波なの
で、眞つ白な波頭を立てた怒濤が飛
沫を上げながら後から〜と押し寄
せて〜と洪水を表現しています。
また、この災害を後世に伝えるため
に、各所に災害碑が建てられていま
す。住吉川流域の住吉学園内にある
水害で流出してきた巨石を利用した
「水害記念碑(流石の碑)」が有名です。

区域は図の通り大きく減少していま
す。これは、これ以前の阪神大水害な
どを教訓とし、河川改修や砂防など
の事業が進捗したことによります。
例えば、住吉川では、1957(昭
和32)年に完成した「五助砂防堰堤」
(高さ30m)が12万³m³の土石流を捕
え下流の被害を防止しています。

阪神大水害80年行事の実施

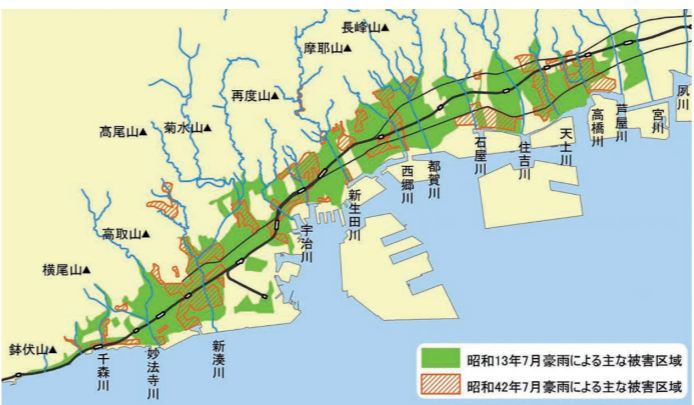
昭和42年7月 豪雨災害
阪神大水害の29年後に迎えた台風
7号による災害です。神戸市では7
月7日～9日の間で379・4mm、
時間最大75・8mmという阪神大水
害に匹敵する降雨に襲われました。
この豪雨によって、表六甲の各地

今年が阪神大水害から80年にあた
るため、災害を後世に語り継ぎ、将来
の災害への備えとするために、国・県・
市が協力し、災害情報の収集・デジ
タルアーカイブ化を行うとともに、
各種の啓発活動の実施が予定されて
います。

宅地開発が山腹部に進行したため、
山腹崩壊や土石流の発生が、六甲山
地の直下に広がる市街地の都市災害
に直接につながったと言えます。

阪神大水害との被害の比較

1967(昭和42)年の豪雨災害は、
阪神大水害と同程度の降雨にも関わ
らず、死者行方不明者が695人か
ら98人へと1/7になるなど被害が
大きく防がれています。また、被害



昭和13年と昭和42年の主な被害区域の比較

六甲山系
グリーンベルト
整備事業

六甲山地では、山に
迫る住宅地を土砂災害
から守るために、これ
までの砂防堰堤などの
構造物による対策に加
えて、樹林の力を利用
した整備である「グリー
ンベルト整備事業」が
実施されています。

翌年から六甲砂防工事事務所(現六甲
砂防事務所)が開設され、国が直接砂
防工事を行うこととなります。従来
の山腹での対策が中心の砂防事業か
ら、砂防堰堤など河川の渓流での対策
を中心とした事業へ変わり、これまで
に国・県・市をあわせて1000基程
度の砂防堰堤が完成しました。
20年以上の歴史を持つ
グリーンベルト整備事業

六甲山地での砂防事業の歴史
明治時代初め、六甲山地は神戸港か
ら山肌が白く見えるほど荒廃し、地表
の土砂の流出による災害が頻発してい
ました。1895(明治28)年、兵庫県
が山腹に植林する工事を開始。

1899(明治32)年には県営の良
元砂防工営所が開設され、六甲山地で
砂防工事が行われました。1938(昭
和13)年の阪神大水害をきっかけに、



小学6年生の植樹活動

では、企業・市民団体による「グリー
ンベルトの森づくり」や、小学生を対
象とした苗木の育成・環境学習を行う
「どんぐり育成プログラム」が実施さ
れています。多くの企業・市民団体や
神戸市内の学校が参加し、六甲山の魅
力、土砂害の危険性、整備事業につい
て知ってもらえる場となっています。

世界の水

水辺空間を生かした都市再生の事例 ーヨーロッパ(その4)ー

一般社団法人 近畿建設協会・技術顧問
元大阪産業大学教授

なかの まさひろ
中野 雅弘

はじめに

前回はオーストリアのウィーン近郊のヴァッハウ渓谷を紹介しましたが、今回は、オーストリアの北部に隣接するドイツを流れるエルベ川を紹介します。エルベ川は、ポーランド、チェコ国境地帯のズデーテン山地に源を発し、チェコ北部、ドイツ東部にあるドイツ文化の源流とされるザクセン地方を北へ流れ、ハンブルク付近で北海に注ぐヨーロッパの主要河川の一つです。

そのエルベ川沿いで、かつてザクセン王国の首都として栄えたドレスデンとその近郊のマイセンを紹介し



ます。この地域はドイツの文豪ゲーテを生み、音楽家のバッハが活躍したライプツヒヒなど、珠玉の都市が連なっていることでも有名です。

1. フランクフルト空港からドレスデンへ

フランクフルト空港（フランクフルト・マイン国際空港）に到着すると、そのまま空港ビル内から高速鉄道のICEへ乗り換えることが出来ます。ICEはフランクフルトを出発してドイツ中央部を北上し、文豪ゲーテゆかりの町をつないだ「ゲート街道」に沿って走り、途中から最高速度300km越えでドレスデンに向かいます。所要時間は、約4時間半です。



ICEの車内は比較的空いていて、特に一等車は横に3座席と広く快適です。

2. エルベ川沿いの古都、ドレスデン

「百塔の都」と謳われたドレスデンは、1806年から1918年までドイツに存在したザクセン王国の首都で、エルベ川の水路を利用し商業都市として栄えていました。当時のドレスデンはバロック様式で統一された宮殿が建ち並び「エルベ川のフィレンツェ」と呼ばれる美しい都でありました。

ドレスデン中央駅からトラムに乗り歩行者天国のプラガー通りを過ぎて、ドレスデン誕生の地アルトマルクト広場に向かいます。広場の周辺には、白いドーム型のフラウエン教会、その西側にはドレスデン城とツヴィンガー宮殿など荘厳な建物が立ち並びます。ドレスデン城の北東側にあるヨーロッパ最古の武芸競技場だったシユタールホーフの外壁にはマイセン陶器のタイルで描かれた「君主の行列」という壮大な壁画があります。

それらの建物を過ぎるとエルベ川



ツヴィンガー宮殿



の岸に着きます。川岸のブリュールテラスは、オープンカフェや遊覧船乗り場がある美しいテラスです。また、エルベ川の対岸はノイシュタット(新市街)と呼ばれ、アウグストゥス橋を渡ると広い芝生の河川敷があります。野外のレストランとともに遊歩道が続き、市民の憩いの空間となっています。

3. 陶器の街マイセン

マイセンは、ドレスデンからローカ列車で約30分のところにあります。



街はエルベ川沿いにあり、街の中心部である旧市街へはマイセン中央駅からエルベ川にかかる橋を渡ります。橋の上からは、川沿いの丘の上にそびえるアルブレヒト城がひととき目を引きます。このアルブレヒト城は15世紀に建てられ、現存するドイツ最古の城と言われています。丸天井と19世紀に描かれた壁画が有名で、ヨーロッパで最初の白磁であるマイセン磁器はここで誕生しました。

工房と、18世紀から現在までの磁器が展示された磁器博物館があり、マイセン焼のすべてが分かります。

まとめ

19世紀までエルベ川はヨーロッパの東西を隔てる大きな境界線の一つでした。エルベ以東はプロイセン王国、オーストリア・ハンガリー帝国、ロシア帝国、エルベ以西はフランス、イギリスなどであり、エルベ川を挟んで現在にも通じる地域の特徴がありました。

次世界大戦での被害が少なかつたことで古い家並みが残り、石畳の道と木組みの家が中世の雰囲気を感じさせてくれます。旧市街地を過ぎて少し歩くとマイセン磁器工場に着きます。ここではマイセン磁器が出来るまでの作業工程を実演で見せる

しかし、中世にはこのエルベ川の水運を利用して、この流域にあるハンブルグやハンザ同盟諸都市と連携した地域には、ドイツを中心とした中央ヨーロッパの繁栄がもたらされました。

今回紹介したザクセン王国の首都ドレスデンと、白磁で有名なマイセンは、ともにエルベ川の水運によって商業が栄えました。そして、他のヨーロッパの各都市と同じように歴史的な遺産を大切に残し、かつ20世紀の戦災後も芸術と文化の都として復興を果たしています。これらにより、現在も美しい町並みで世界中から観光客を呼び込んでいます。

飛鳥川の上流部、奥明日香と呼ばれる地域にあります。飛鳥川は飛鳥時代の政治・文化の中心地であった明日香村を流れています。万葉集で「明日香川 明日も渡らむ 石橋の 遠き心は 思ほえぬかも」と歌われた石橋と言われています。橋を架けることが現代のように容易でなかった時代には、このような飛び石が地域と地域、人と人をつなぐ重要な機能を持っていて、「つなぐ」と言う意味で橋の原点と言うべきものと考えられます。この周辺には、飛鳥川上坐宇須多伎比売命神社、大化改新のかけの功労者といわれる南淵請安の墓や日本最大級の石室をもつ石舞台古墳などがあります。



飛鳥の石橋
(飛び石)

網かけ神事(女網)

飛鳥の石橋の付近の飛鳥川の谷をわたって、2か所で注連縄が張られた珍しい光景が見られます。石橋のすぐ下流の稲刈地区には男網、そこから2kmほど上流には、柏森地区の女網があります。網の中央には、それぞれ男性と女性を表す稲穂づくりのものが飾られています。起源は不明ようですが、古くから伝わる正月行事の一つとして毎年、豊作を祈り地区総出で新しく掛け替えられています。



箱ヶ瀬橋(夢のかけはし)



福井県の九頭竜湖に架かっている長さ266mの吊り橋で、1967(昭和42)年に完成。九頭竜ダム建設に伴う付け替え道路として箱ヶ瀬地区と対岸をつなぐために建設されました。湖面にスレンダーな姿を映し、静かな佇まいを見せていますが、実は日本の橋梁技術に大きな貢献をしている橋です。1988(昭和63)年に開通した本州四国連絡橋の下津井瀬戸大橋のモデル橋として、主ケーブルに平行線ケーブルが採用され、エアスピニング工法という当時の最先端の工法で架設されました。

エアスピニング工法…吊り橋のケーブル架設の工法の1つ。主ケーブルを構成する数百～数万本の鋼鉄のワイヤーを1本ずつ空中を渡し、主ケーブル全体を形成する方法。

九頭竜ダム

九頭竜ダムは、建設省(現国土交通省)と電源開発(株)とが共同して洪水調節と発電を目的に建設したもので、1968(昭和43)年7月に完成。福井市を流れる九頭竜川の上流部、大野市(旧和泉村)にあります。高さ128mの「傾斜土質遮水壁型ロックフィルダム(岩石と土砂を積み上げて建設するダム)」です。ダム貯水池の九頭竜湖は、総貯水容量3億5300万m³で、日本のロックフィルダムの中で3番目の規模を誇っています。



名橋

— 第六回 —

橋は、川などによって分断された地域をつなぐ機能を持っています。大和言葉の「はし」は「端」が原義で「はし」はその端と端をつなぐことで「橋」でもあり、「階」でもあり、「梯」でもあり、「橋」でもあり、つなぐことを意味していると言われています。(『岩波新書「橋と日本人」上田 篤』)
英語の Bridge も同様で、名詞の「橋」の他に、動詞として「橋渡し」や「隙間を」埋める」という意味を持っています。
今号では地域と地域とを何気なく繋いでいる、橋に隠されている意外な歴史の意味と、技術的進歩への貢献に光を当てました。



浮庭橋

海外からの観光客を含め、多くの来訪者でにぎわう大阪のミナミを流れる道頓堀川の難波地区の西に架かっている長さ76mの吊り橋タイプの人道橋です。多目的イベント施設などがある湊町リバーペースとその北側の飲食施設である「キャナルテラス堀江」を結ぶ人道橋として2008年に開通しました。斜め45度に架かっている橋のため、吊り構造のメインデッキと川に直角のサブデッキで構成されています。観光に訪れた人々と散歩やジョギングなどの地元の人たちでにぎわっています。橋の建設の費用の半分近くが、川沿いの開発に関連した企業からの寄附が当てられました。明治の中之島公会堂などの公共施設の建設に民間が協力するという大阪の伝統が引き継がれているようです。



道頓堀川の水辺整備(とんぼりリバーウォーク)

「水の都・大阪」再生を目指し、水面に近い親水性の高い川沿いの遊歩道整備などにより水辺空間の積極的な活用により、川とまちを一体化し賑わいのある空間が創出されました。とんぼりリバーウォークと名付けられた河岸沿いの遊歩道の整備と水質浄化対策による河川水質の浄化が功を奏し、多くの人々が川に訪れるようになり賑わいを取り戻しています。

不老橋は、万葉の時代から歌に詠まれ名が広く知れ渡っていた現在の和歌山市の和歌の浦地区にあります。江戸時代に紀州東照宮御旅所の移築に伴い、1851(嘉永4)年に完成したアーチ状の石橋です。東照宮の祭礼である和歌祭の際に、徳川家や東照宮の関係者が御旅所に向かうために通行した「お成り道」として架設された橋です。これらの人々の華々しい行列の様子を描写した絵図が今も残されています。橋台のアーチ部は、肥後熊本の石工集団の施工、欄干については、湯浅の石工

不老橋



石屋忠兵衛の作といわれています。石橋は九州地方では多く造られています。これ以外の地域では珍しいものです。

紀州東照宮
1621(元和7)年に、紀州藩初代藩主徳川頼宣によって、南海道の総鎮護として創建された権現造りの社殿です。「西の日光」とも呼ばれるように、左甚五郎の彫刻や狩野探幽の壁画など漆塗・極彩色の彫刻や狩野・土佐派の絵などが残されています。参道の先に、「侍坂」と呼ばれる108段の急階段があり、そこを上り詰めると朱塗りの楼門が現れ、その先に本殿が鎮座しています。



日本のコンクリート橋で新技術の先駆けとなった2つの橋

滋賀県甲賀市を走る信楽高原鉄道の勅使・玉桂寺駅間にひっそりと位置する橋梁ですが、世界的にも早い時期の1954(昭和29)年に架設された日本初の本格的なポストテンション方式の橋長31mの鉄道橋です。設計施工にあたり当時の国鉄の技術者により多くの基礎データが収集され、その後の技術の発展に大きく寄与しています。現在も活用されていることから、2008年に国の登録文化財に登録されています。

信楽高原鉄道橋
(第一大戸川橋梁)



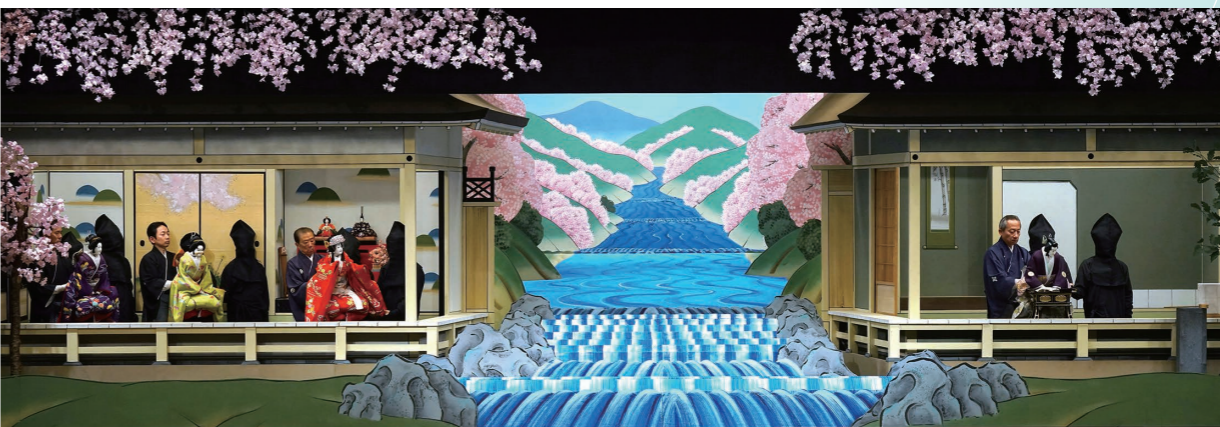
ポストテンション方式…コンクリートの弱点である引張力に弱いことを補うためにあらかじめ構造物に圧縮力を加えた工法。

明治時代、京都の灌漑、上水道、水運などのために琵琶湖疏水が建設されました。その第一疏水にかけられた橋が日本で最初の鉄筋コンクリート橋です。鉄筋コンクリートの技術は、1867年にフランスで発明されましたが、早くも1903(明治36)年に琵琶湖疏水の設計や監督に携わった田邊湖郎によって建設されました。現在は、下部が鉄骨で補強されていますが、110年経った現在でも現役としての機能を果たしています。



歴史と名作の舞台 紀の川、吉野川

評論家・文化プロデューサー
河内厚郎



人形浄瑠璃文楽「妹背山婦女庭訓・妹背山の段」 協力：人形浄瑠璃文楽座 写真提供：国立文楽劇場



妹背山付近の紀の川

能や歌舞伎に文楽（人形浄瑠璃）

——わが国の古典劇には関西を舞台にした名作が多いことから、それらの舞台やモデルとなった場所を紹介する『ものがたり街道〜三十三所巡礼〜』を関西広域連合が発行した。今年、「西国三十三所巡礼」が草創千三百年を迎えるのを記念して新たに編集された冊子である。お染久松の幼い恋物語が浄瑠璃や歌舞伎に脚色されて、ゆかりの野崎観音（大阪府大東市）が落語「野崎詣り」や歌謡曲「野崎小唄」でもポピュラーとなったように、時代を超えて物語を再生産してきた三十三の名所が関西広域連合管内（滋賀県・京都府・奈良県・大阪府・兵庫県・和歌山県・鳥取県・徳島県・大阪市・京都市・神戸市・堺市）から選ばれた。

海外にも紹介された「妹背山婦女庭訓」

ここに紹介されている『妹背山婦女庭訓』も「ロミオとジュリエット」のようだとコメントしたのは、「ウエストサイド」も「ロミオとジュリエット」の翻案だからである。

（松竹）派に分かれて対立していた文楽が、昭和38年（1963）に合一した際、道頓堀の文楽座（のちの朝日座）で「山の段」が上演されたのは、敵対する旧家が子供たちの犠牲を超えて和解するというあらすじを両派の和解に託した趣向であった。

仲の悪い旧家に育った若い男女が死によって結ばれるという筋書に、『ロミオとジュリエット』の影響を指摘する声は昔からある。シェイクスピアの名高い恋愛悲劇がイギリスからオランダへ、さらにオランダから長崎経由で大坂の芝居町へ伝わったという仮説だ。戦後に『妹背山婦女庭訓』を観たアメリカ人が「ウエ

ストサイドストーリー」のようだとコメントしたのは、「ウエストサイド」も「ロミオとジュリエット」の翻案だからである。

文政9年（1826）、長崎出島のオランダ商館長（カピタン）の江戸参府に同行した帰路、大坂・角の芝居（角座）でこの芝居を観劇した、カピタン付き医師シーボルト（ドイツ人）の著した『江戸参府紀行』には、花道や回り舞台など歌舞伎特有の舞台機構、女形、浄瑠璃語りと三味線弾き、『妹背山婦女庭訓』の筋書などが記されている。歌舞伎が西洋に紹介された最初の本かもしれない。シーボルトもこのドラマを「ロミオとジュリエット」のようだと、フランスの作家ドーデ（『アルルの女』や『風車小屋だより』の作者）に語っているのだ。江戸時代を通じ、オランダ商館関係者が何人も江戸を訪れていながら、江戸歌舞伎を観た記録はない。一方、大坂の絵師・松好齋米兵衛の『薬屋図会拾遺』は、享和3年（1803）、カピタンが江戸参府の帰路、道頓堀で人形浄瑠璃を見たたび見物し、中の芝居（中座）では歌舞伎を観たと記す。

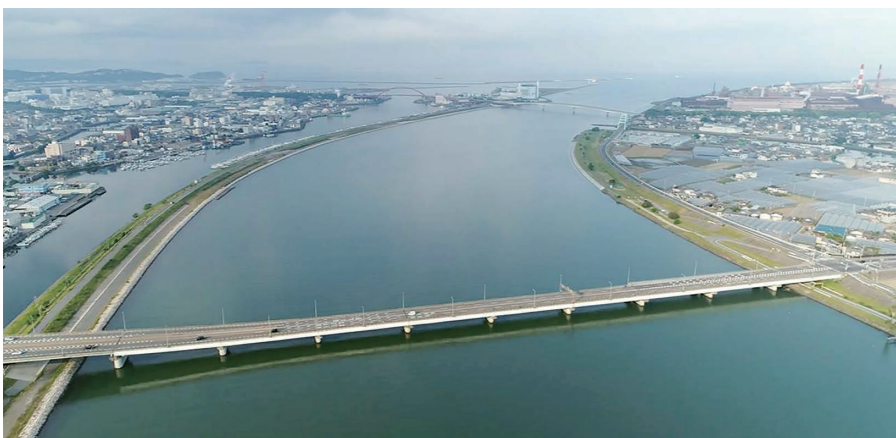
女庭訓』（近松半二・三好松洛らの

合作）は、明和8年（1771）に大坂・竹本座で初演された人形浄瑠璃で、潰れかけていた竹本座が息を吹き返すヒットとなり、歌舞伎でも同年に大坂・角の芝居（のちの角座）で初演され人気演目となってきた。その屈指の名場面（山の段）では、滝車を使った吉野川の流水が舞台中央を客席に向かって流れてくる。舞台の上手（客席から見て右側）には紀伊国の背山と大判事の家、下手（左側）には大和国の妹山と太宰の家。兩岸で展開されるドラマを川の中から観客は眺めるとい見立てで、歌舞伎では「吉野川」の通称で呼ばれてきた。

幕が開くと、太宰の後室定高の娘・雛鳥と大判事清澄の息子・久我之助が互いに愛し合いながらも両家の不和ゆえに結ばれぬ不幸を川越しに嘆くところへ、清澄と定高が重い足取りで帰館してくる。歌舞伎では、左

河道の変遷

奈良県内では県南部の地名に因み吉野川と呼ばれる、紀の川の全長は約135km。近畿地方では由良川につぐ長流で、奈良盆地と和歌山平野、さらに瀬戸内海を結ぶ交通の動脈として重要な役割をはたした。奈良・三重の県境に位置する多雨地帯の大台ヶ原を源流とし、紀伊山地を北西



紀の川 河口部 写真提供：国土交通省 和歌山河川国道事務所

右に設けられた両花道で二人が声を掛け合う（川を隔てて会話するという演出）。時の権力者、蘇我入鹿の「雛鳥を入内させよ」との命には従わぬと決意し、涙ながらに娘・雛鳥を手にかけて定高は、その首を雛人形と共に川に流して大判事に受け取らせ、両家は過去の行きがかりを捨てて和解し、若い男女は死して夫婦となる。小説家の三島由紀夫は自決の数日前、ワグナーの楽劇のようにロマンティックなこの劇を念頭に置き、「近松半二はなんて凄い作品を書くのだろう」と歌舞伎俳優の中村扇雀（現・坂田藤十郎）に述べたという。谷崎潤一郎の名作『吉野葛』にも、幼い頃に大和を旅した折、「あれが（芝居に出てくる）妹背山だ」と母から教えられたことを、主人公が大和再訪で思い出す件がある。

文楽では、太夫&三味線が上手・下手の両方に座り、それぞれ大判事と定高を語る。戦後、組合派と会社

へ流れ、高見川と合流して西へ曲がり、中央構造線の南側に沿って、竜門山地・金剛山・和泉山脈を北に見ながら、ほぼ真っ直ぐに西流し、和歌山市の湊付近で紀伊水道に注ぐが、昔からそこに河口があったわけではない。古墳時代から平安時代まで主流は和歌浦（現・和歌川）へ注いでいた。11世紀頃の洪水で大浦へ注ぐようになり、明応4年（1495）の地震・津波で海岸の砂丘を突破、ほぼ現在の流路となった。それから明治初期まで網状に分流し、川幅は狭く曲流していたが、その後の改修により一本化・直線化・拡幅され、高い連続堤防が築かれた。

紀の川の沿岸は多くの歌にも詠まれてきた。「人ならば 母が最愛子ぞあさもよし 木の川の辺の 妹と背の山」「麻衣 着ればなつかし 木の国の 妹背の山に 麻詩く吾妹」（共に作者不詳）など、畿内南限とされる妹背山の歌は万葉集に15首。山部赤人の「若の浦に 潮満ち来れば 濁をなみ 葦辺をさして 鶴鳴き渡る」は河口・和歌浦の描写である。

15世紀の地震・津波で現ルートへ



名手本陣



名手本陣のひな祭り



道成寺



根来寺

紀の川の改修、治水と利水

変わった紀の川は、梅雨や台風のため氾濫を繰り返したが、慢性的な水不足にあえぐ奈良盆地の人々にとり豊富な水量は魅力であった。

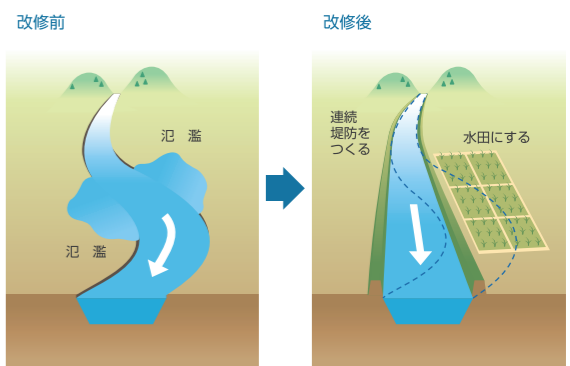
中世以来の紀伊国は、高野山や粉

河寺や紀三井寺など寺社勢力が強く、天正元年（1584）の小牧・長久手の戦いでは、根来寺や雑賀衆や太田党が徳川家康に味方し羽柴秀吉へ敵対姿勢を見せたため、怒った秀吉は翌年、6万の軍勢を率いて紀州征伐に乗り出した。このとき京都へ持ち去られた道成寺（日高川町）

の鐘が、能の『道成寺』に登場する鐘のモデルとなった。熊野詣の帰路に立ち寄るとの約束を安珍に反故にされた清姫は、怒りのあまり大蛇と化し、安珍が身を隠した道成寺の鐘に体を巻き付け、炎を吐いて焼き殺す。平成16年（2004）この鐘が道成寺へ里帰りした際、歌舞伎俳優の故・中村富十郎（5世）が駆けつけたのは、能の『道成寺』を歌舞伎舞踊に仕立てた『京鹿子娘道成寺』の初演（宝暦3年・1753）が初代富十郎だったことに由来する。初代富十郎の父で女形の祖とされる、初代芳沢あやめは紀州中津村（日高川町）の出身で、現地には記

念館が建つ。

根来寺を焼き討ちした羽柴軍は、太田党の本拠地たる太田城（現・和歌山市太田）を攻撃したが、奇襲による反撃を受け、秀吉得意の水攻めに切り替えた。このとき築かれた堤が紀の川における初の大規模な河川工作物となる。秀吉没後、関ヶ原の役の恩賞として紀伊国を領した浅野幸長（赤穂事件で名高い浅野内匠頭）の先祖は幸長の次弟）は、古くからあった堤防を改修して街道とした。大坂の陣の後、安芸広島に転封となった浅野氏に替わり、元和5年（1619）に入部した徳川頼宣（家康の十男）は、南海道を鎮護し大坂や西国を監察する和歌山城を拡張して城下を発展させるには紀の川の治水が不可欠と考え、嘉家作丁（和歌山市）から地蔵の辻（和歌山市）に至る堤防を建設。これを補強するのに柳を植えたことから「柳堤」と呼ばれるようになり（現在は桜が植えられている）、地蔵の辻から八軒屋まで強化された堤防は「松原堤」と呼ばれた。寛永3年（1626）、岩出（現・岩出市）付近に建設された「花見堤」は、春になると一帯の



紀州流治水

桃園が見事に開花することから命名されたという。上流の伊都郡（かつらぎ町）には、三代将軍・徳川家光の命により、高野山大塔を建築するための貯木機能を兼ねる「上様堤」や「千間堤」が寛永・寛文年間に築かれた。

紀の川の治水と利水を組み合わせた総合開発に挑んだのは第5代藩主・徳川吉宗である。連続堤を直線化した堤防を改築して切れ目をなくし、河原と分離させた氾濫原に用水を引いて新田を開発する「紀州流治水工法」は、吉宗が江戸幕府第8代将軍に就任後、利根川・荒川の治水・利水に採用され関東平野の大規模灌

漑事業に結実したが、宝暦9年（1759）の『地理細論集』「川々御普請心附之事」（眞壁用秀）は、河川を直線化し新田開発が進められて洪水被害も大きくなったと記す。明治22年（1889）8月18～19日と9月11日の水害は全県的災害となり、県下の溺死者千人余。西和佐村の史料では、紀の川堤防の松並木を明治初年に伐採したため松根が腐植し堤防に穴をあけた人災だとしている。室戸台風、ジェーン台風、紀北水禍、第2室戸台風など、昭和の水害では、堤防の強化により、大河川へ流入する支流の滞水や後背湿地の住宅造成地の排水不良地に水が滞留するといった都市の内水害へ変化してきた。

有吉佐和子の「川」ものがたり

紀州徳川家（徳川御三家のひとつ）の藩士が参勤交代で大和街道を江戸へ向かう際に使った名手宿の本陣（紀の川市名手市場）は、市場村の大火災（1714）後、1718年に新築された。主屋と土蔵の保存状態が良好で本陣の姿をよく伝え、国

の重要文化財「名手本陣妹背家住宅」や史跡「旧名手宿本陣」に指定されている。徳川頼宣の紀州入り後、名手村の大庄屋に任じられ、紀伊藩主の参勤交代では第一番宿所に指定され幕末まで続いた「妹背家」に、華岡青洲の妻となる加恵はうまれた。有吉佐和子の名作『華岡青洲の妻』（1966）は、わが国で初めて麻醉による手術を執行した青洲の功績を、母・姉・妻の献身的な協力に母（姑）と妻・加恵（嫁）の確執をからめて描いている。映画や演劇にとりあげられ、舞台では再演を重ねて、先述の五世・中村富十郎も青洲を演じた。

輝いた。『有田川』（1963）は、史上空前とされる明治22年（1889）の十津川大水害（紀和水害）で有田川町から有田市箕島へ流れ着いた娘が、度重なる川の氾濫に運命を弄ばれながら、昭和28年（1953）の紀州大水害にも挫けず、蜜柑づくりに打ちこんで生き抜いていく物語である。

幼年期と戦中期を紀州で育った有吉佐和子（1931～1984）には、激動の近代を生きた女性の一生を、たゆまず流れる川のイメージに重ね合わせた、一連の「川もの」作品群がある。明治生まれの女とその娘、戦後世代の孫という素封家の女性三代を描くことで明治・大正・昭和の三代をたどる『紀ノ川』（1959）は、NHK大阪放送局がドラマ化（1964年10月28日～翌年3月31日）、主演の南田洋子が日本放送作家協会賞最優秀女優賞に

念を描く。昨年（平成29年）11月、この伝承を描いた室町時代の絵巻物『道成寺縁起』（道成寺所蔵、国重要文化財、上下2巻、上下巻とも全長約11m）が、修復の終了を記念し、和歌山県立博物館（和歌山市）の特別展「道成寺と日高川」で初めて同時公開された。冒頭に紹介した『ものがたり街道〜三十三所巡礼〜』の札所に、和歌山県下からは道成寺と高野山が選ばれた。

冊子を所望する方は、大阪府文化課（06-6210-9306）や和歌山県文化学術課（073-441-2050）等へ申し込みを。送料実費。ウェブサイト「ものがたり街道〜三十三所巡礼〜」でも閲覧可。http://www.bunkanomichi.com/

旧瀬田川洗堰の秘密

近畿地方整備局 淀川河川事務所 調査課長
 (前)近畿地方整備局 琵琶湖河川事務所 調査課長 森田 一彦

1. はじめに

(1) アクア琵琶来館者

100万人に与えてきた誤解

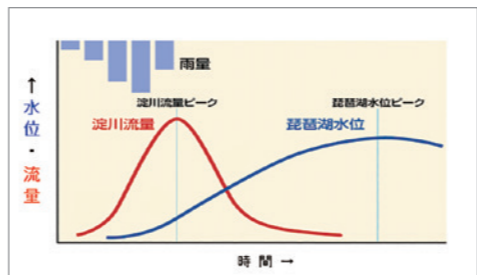
「洗堰の実物大なんて嘘だ。洗堰がこんなに小さいはずがない」。

平成28年(2016)12月、水めぐみ館アクア琵琶のエントランスで琵琶湖工事事務所時代のOBである宮井宏氏は私たち職員に言いました。アクア琵琶に展示している旧瀬田川洗堰(以下、「旧洗堰」)の模型は、水中部分が省略されているため、「実物大」ではないという趣旨でした。伝統ある琵琶湖河川事務所が100年に亘って取り組んできた琵琶湖の水管理と砂防事業の成果を伝える広報施設「アクア琵琶」、平成26年(2014)9月に来館者100万人を記念した「アクア琵琶」、その目玉展示の説明に重大なミスがあったのです。

琵琶湖の水管理と砂防事業の成果を伝える広報施設「アクア琵琶」、平成26年(2014)9月に来館者100万人を記念した「アクア琵琶」、その目玉展示の説明に重大なミスがあったのです。

誤解を無くすため、展示模型は旧洗堰のほぼ1/3に相当することが見て取れるような図を掲示することとしました。ところが、それを作成するには全体像を明らかにする必要があります。そのため、沖野忠雄論文、宮川清報文、旧洗堰堰桁配置表等の調査および旧洗堰の現存遺物の測量、調査を行うこととなりました。

本文は、このような一連の調査の



図一1 琵琶湖水位と淀川流量の関係、淀川流域概要図

中で、今まで知られていなかった先人の苦勞や工夫を見つげながら、過去100年にわたる琵琶湖の水管理の実態を明らかにしようとするものです。結果、以下のことがわかりました。

- ①旧洗堰は、計画時点よりも1m低く施工されていた
- ②旧洗堰の全開放流は、全ての堰桁を開放しておらず、堰桁40本分の石桁を配置したままだった
- ③旧洗堰の全開・全閉に要した時間は約20時間程度で、閉鎖よりも開放に時間を要していたが、定説よりも短かった

(2) 淀川水系の治水システムと瀬田川洗堰

淀川水系は、図一1に示したように木津川、桂川等の流量が先に増大し、続いて淀川本川がピークを迎え、その後、時間差をもって琵琶湖の水位がピークを迎えるという特性があります。

この特性を活かし、下流が危険な時は、下流の洪水防衛のために琵琶湖からの流出量を制御し、下流の洪水

水がピークを過ぎた後、琵琶湖の水位上昇を抑制するため放流を行うこととしています。

瀬田川洗堰は、琵琶湖からの流出量を制御するために設置された施設で、旧洗堰は明治38年に完成しました。

旧洗堰は、写真一1、2のように



写真一1 旧瀬田川洗堰



写真一2 アクア琵琶の模型

幅12尺(3・6m)の水通し32門を有し、堰柱は無筋コンクリートで表面に煉瓦が貼られており、水通しに、長さ14尺(4・2m)、8寸(0・24m)角の木材を人力で挿入する角落とし式で越流量を調節する構造でした。

旧洗堰は、人力で堰桁を操作していましたが、昭和36年(1961)、より迅速かつ的確に流量制御できる機械式の現洗堰に改良されました。

なお、旧洗堰の運用時には、操作規則は制定されていませんでした。

2. 計画よりも1m低く作られた瀬田川洗堰

(1) 沖野忠雄の計画

旧洗堰は、明治27年(1894)に

内務省大阪土木監督署(現国土交通省近畿地方整備局)署長の沖野忠雄がとりまとめた「淀川高水防禦工事計画意見書(以下、「意見書」)において、設置が計画されました。意見書においては、琵琶湖の水位を低下させ、沿湖の被害軽減を主目的とし、併せて下流淀川の洪水を軽減するために、瀬田川を浚渫し起伏自在の洗堰を設置するとされています。

意見書の記載内容は、図一2のとおりで、琵琶湖の常水位+2・75尺(B.S.L.+0・83m)に対して、洗堰に桁を3尺(0・91m)挿入したうえで、越流水深を9尺(2・73m)確保するとされています。

これから求められる旧洗堰の敷高はマイナス9・25尺(B.S.L. マイナス2・80m、O.P.B.+82・81m)となります。

ところが、アクア琵琶に展示されていた旧洗堰の横断面に記載されている敷高の数値は「O.P.+270・00尺」「O.P.+81・82m」でした。数字が似ておりややこしいのですが、意見書の「O.P.+82・81m」と比較すると0・99mの差異が生じます。

コラム 琵琶湖水位の表記について

琵琶湖水位については、明治7年(1874)2月から瀬田の唐橋の上流に設置した「鳥居川観測所」で観測されてきました。平成4年(1992)4月からは、琵琶湖内5観測所の平均値としていますが、旧洗堰の運用時には、鳥居川観測所の値を琵琶湖水位としていました。

そのため本文では鳥居川観測所の水位を「水位」とし、B.S.L.(Biwako Surface Level)で表記しています。

B.S.L.±0mは、琵琶湖の水位観測を開始した明治7年には大阪湾の最低潮位(O.P.)に対して+85.614mの高さでした。その後、昭和41年(1966)にT.P.±0.00m=O.P.+1.3mと決定されました。

これ以降、従来使用していた+85.614mを踏襲し、O.P.と区別するため、O.P.B.として表記することとなりました。

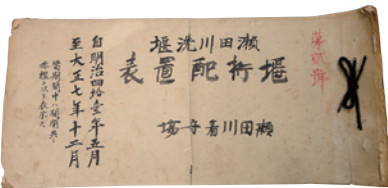
琵琶湖水位と各基準水位の関係			
B.S.L. 琵琶湖の水位	T.P. 東京湾平均海面	O.P.B. 琵琶湖の基準面	O.P. 大阪湾最低潮位
B.S.L.+1.4m	TP.+85.771m	OPB.+87.014m	OP.+87.071m
B.S.L.±0m	TP.+84.371m	OPB.+85.614m	OP.+85.671m
B.S.L.-84.371m	T.P. 0m	O.P.B.+1.243m	O.P.+1.3m
B.S.L.-85.614m	T.P.-1.243m	O.P.B. 0m	O.P.+0.057m
B.S.L.-85.671m	T.P.-1.3m	O.P.B.-0.057m	O.P. 0m

(2) 瀬田川洗堰堰桁配置表を紐解く

当時の堰桁の配置状況を記録した

「瀬田川洗堰堰桁配置表(以下、「配置表」)は、琵琶湖河川事務所の広報施設である水めぐみ館アクア琵琶に保管

されています。



写真一3 瀬田川洗堰 堰桁配置表

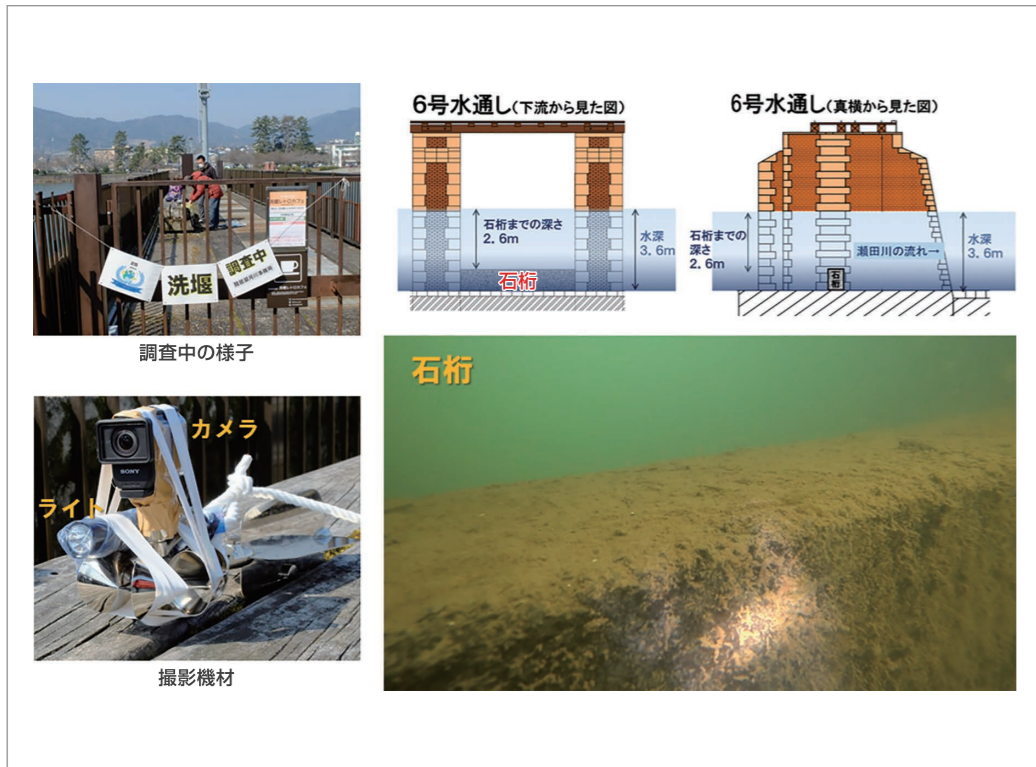


図-6 石桁の撮影の様子

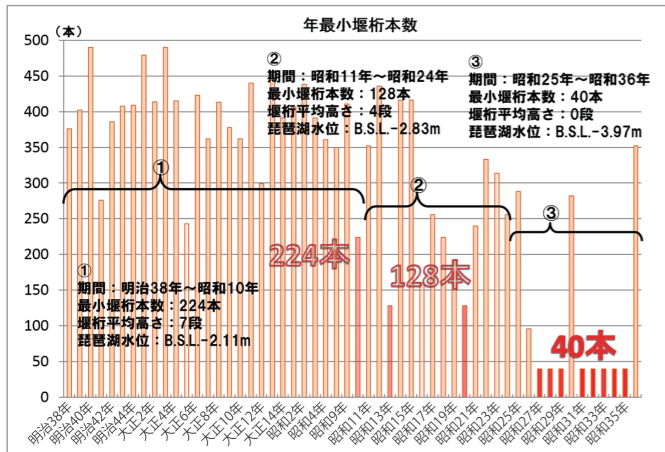


図-7 堰桁本数の年最小値



写真-5 昭和23年の航空写真

にライトを取り付け、旧洗堰の6号水通しと3号水通しに沈めました。撮影した映像を確認したところ、鮮明に石桁が記録されていました。石桁の上流側は堆積物がほとんどなく、石桁全体を視認することができました。表面にはコケが多く付着

していましたが、隙間や目地等は見られず、石桁が一枚ものであることが確認できました。ただ、このような巨石がどのように作られ、運搬されたのかが、新たな謎として残りました。ちなみに、1号水通しには、魚道

が設置されていたため、石桁は挿入されなかったものと思われます。(3) 瀬田川改修の進捗と堰操作の推移
旧洗堰は、洗堰設置に関する滋賀県議会での激しい質疑や、洗堰設置に反対した琵琶湖沿岸の住民の声を

その後、瀬田川改修の進捗に伴い、堰桁本数の年最小値は小さくなり、最下段まで堰桁を開放するようになったのは昭和27年(1952)になってからのことでした。このように操作の必要性が低く、平面的にも流れに影響しない左岸端部10門の下段に石桁が配置されていたのではないかと推測します。なお、1門あたりに挿入する桁の本数について、意見書では17本、「沖野忠雄と明治改修」(土木学会)では20本とされてきましたが、配置

聞き、被害軽減の一助とすべく設計が見直され、当初計画よりも1m低い敷高で建設されたと考えます。しかし、写真1-5に示す昭和23年(1948)の写真からも見て取れるように洗堰下流で合流する大戸川からの土砂流出によって河床が高いため、下段の桁を開放する機会がなかったと思われる。旧洗堰における桁本数の年最小値は図1-7に示したとおり、昭和10年(1935)までは224本、水通し1門あたり7本です。つまり、洗堰設置後30年間は、7段目以下の堰桁は開放されることがなかったということになります。

配置表は、図1-3、4のように縦軸に堰桁の本数を、横軸の左が1号、右が32号の水通しとなっており、下流を望むように記載されています。配置表は、明治38年(1905)8月2日から昭和36年(1961)5月19日まで、56年間におよぶ操作記録が8冊に分けて保管されています。この配置表を紐解くことで、2、3、3、3回の堰操作内容と、1、8、5、5、6日分の堰桁配置状況が明らかとなりました。

(3) 旧洗堰の現存遺物の調査
旧洗堰は昭和39年(1964)に撤去されましたが、先人の偉業を後世に伝えるため32門のうち、左岸6門、右岸1門が存置されています。文献から旧洗堰の敷高が変更されたことが推測されたため、平成29年(2017)3月、測量し確かめるこ

旧洗堰においても全ての堰桁を開放していたと想像していましたが、1、8、5、5、6日間の操作における堰桁本数の最小値は40で、0ではありませんでした。昭和35年(1960)7月8日の操作日誌には「全開放」という記述がありますが、その際の堰桁数も40であって、0ではありません。旧洗堰においても全ての堰桁を開放していたと想像していましたが、トすべてを引き上げる操作「全開放流」を行います。

(2) 現在も配置されたままの石桁
石桁を挿入していた2号から11号のうち、2号から6号までが現存しているため、現在も石桁が配置されたままなのではないかと想像し、簡易な打音調査を行いました。土砂等の堆積が少ないと考えられる流心部の6号水通しに碇を沈めたところ、キンという金属質の音が聞こえ、鉄と石とがぶつかる感触を確かめることができました。平成29年3月20日、ビデオカメラ

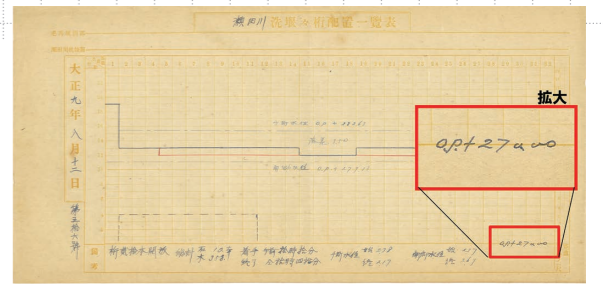


図-3 瀬田川洗堰 堰桁配置表(大正9年8月13日)

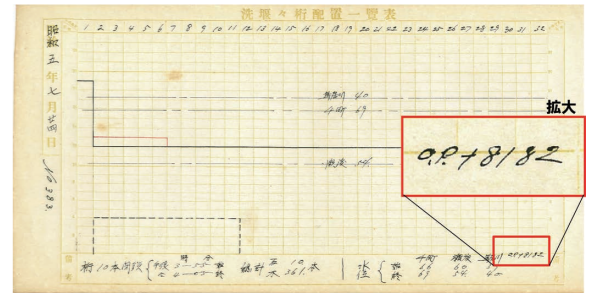


図-4 瀬田川洗堰 堰桁配置表(昭和5年7月24日)



写真-4 旧洗堰の測量状況

測量から得られた敷高は+8.1、7.3mで、旧洗堰の敷高が、意見書の記載内容よりも1m程度低いことが判明しました。これまでの調査結果を整理すると表1-1のようになり、敷高は+8.2・8.1mで計画されていたが、施工時には+8.1・8.2mに変更されたということが明らかとなりました。

根拠	敷高(O.P.B)
意見書	82.81m
横断図	81.82m
配置図	81.82m
測量	81.73m

表-1 敷高比較表

3. 旧洗堰の“全開放流”

(1) 最小堰桁本数40本の理由

なぜ、すべての桁を開放しなかったのか、また、40本はどこに配置していたのかという疑問が生じました。このヒントとなる記述が図1-5に示す大正6年(1917)5月17日の配置表にあります。備考欄に「5月9日 石桁10(2-11点線内)入換」と記載されています。つまり、2号から11号までの10門の1段目から4段目には、木桁ではなく石の桁を挿入していたということです。

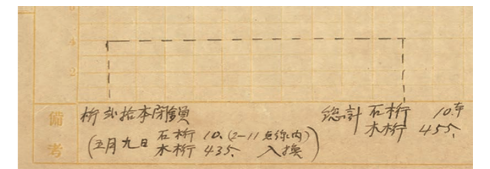


図-5 瀬田川洗堰 堰桁配置表(大正6年5月17日)の備考欄

由良川水害の歴史と防災対策(2)

舞鶴工業高等専門学校名誉教授
 (株)東京建設コンサルタント関西本社顧問

川合 茂

前号では由良川の概要を説明したが、今号は災害について述べる。

3. 水害の履歴と被害状況の概観

由良川流域は古くから洪水災害に悩まされてきたところで、特に、流れて山間部を出て盆地に入る綾部から下流の地域では頻繁に浸水被害を受けている。「由良川改修史」(建設省福知山工務事務所、昭和55年)には、1550年からの洪水記録が記載されている。江戸時代から現在までの洪水位を単純に比べることはできないものの、福知山水位8m超の洪水が最大級で、慶応2年



図-1 音無瀬橋流失(福知山市上柳町) 明治40年の水害



図-2 福知山市街 昭和28年の水害

(1866年)の8.18m、明治40年の8.48m、平成25年の8.30mの3回ある。そして、1666年(1945年)の279年間の水害発生頻度は約3年に1度の割合である。

図-1は明治40年の洪水によって音無瀬橋が流失した様子で、当時の被害の大きさが知られる。図-2は昭和28年の台風13号襲来時の状況で、屋根に逃れた人々の救出風景である。昭和28年の台風13号は近畿地方や東海地方を中心に大きな被害をもたらした。由良川沿いでも、死者36名、家屋の流失・全壊1,383戸を出す大災害になった。福知山では堤防が決壊している。このときの福知山水位は7.8mに達し、最大流量は6,500m³/sと推算されている。この流量が由良川の洪水防御計画における基本の流量になっている。

その後も浸水被害を伴う洪水が何度も発生している。特に、昭和34年の8月と9月の伊勢湾台風、昭和36年、昭和40年、昭和47年、平成16年、平成25年、平成26年(福知山市街の

支川の氾濫)の被害が大きく、災害救助法が適用されている。その適用回数は、昭和28年からの62年間で9回にのぼる。平成29年にも福知山で計画高水位7.74mに迫る7.39mの水位を記録し、堤防未整備区間での氾濫被害が発生した。しかし、下流部では、平成28年の堤防完成によって由良川本川の水による被害は生じなかった。堤防整備の重要性が知られる。

4. 平成16年と平成25年の洪水の比較

(1) 洪水災害の概要

平成16年10月に台風23号、平成25年9月に台風18号が襲来し、日本各地で大きな災害をもたらした。由良川流域でも甚大な浸水災害が発生した。平成16年の福知山水位は7.55m、平成25年は8.30mに達した。計画高水位が7.74mであるから、大変な大水であったことが知られる。平成16年の時は観光バスが水没し、洪水の中、乗客がバスの屋根で救助を待つ一夜を過ごしたことがクローズアップされた。平成25年は、由良川流域にわが国初の大雨特別警報が発令された時である。この両年の浸水被害の大きくなった



図-4 流域概要と浸水域の模式図

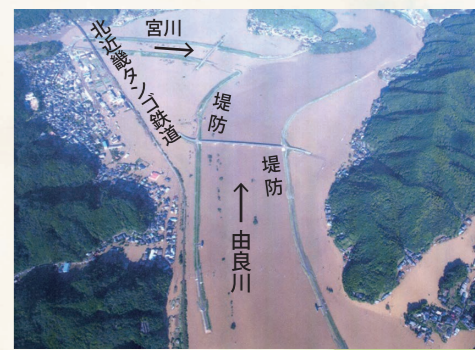


図-3 平成25年の浸水状況と整備途上の堤防

表-1 被害状況

被害	平成16年	平成25年
浸水面積(km ²)	約26	約25
浸水戸数(戸)	約1,670	約1,600

(国土省福知山河川国道事務所調べ)

表-1に示すように、同じであることが知られる。なお、平成16年の際には5名の水死者を出している。

(2) 出水状況と降雨

両年の被害状況は同じであるが、出水状況は少々異なる。図-5は平成16年と平成25年の最高水位の縦断変化を示している。河口から25km(35kmのところを境に、その上流部では朱線の平成25年の方が高く、綾部、福知山で55~60cm高い。これに対して下流では青の平成16年の方が高く、舞鶴の大川橋で約50cm高くなっている。また、水防団待機水位以上の洪水継続時間は、図-6に示すように、平成25年の方が下流部で1~2時間、中流部で3~5~6時間長い。こうした両年の違いは雨の降り

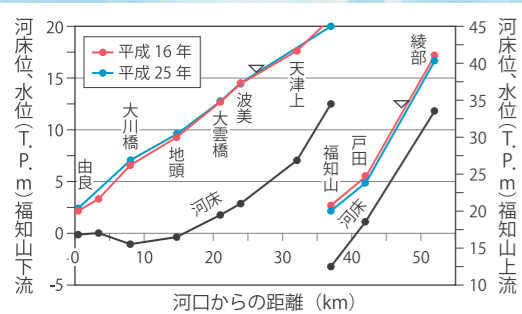


図-5 平成25年と平成16年の最高水位の縦断変化

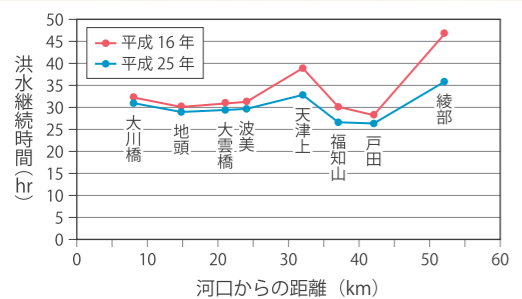


図-6 水防団待機水位以上の洪水継続時間

東部は赤で、平成25年の方が10~20mm多い。中・下流域と土師川流域の広い範囲が青で、平成16年の方が多く、下流域西部では40~50mmも多い。つまり、平成25年は平成16年に比べて上流域からの出水が多く、平成16年の方は土師川流域・下流域からの出水が多かっ

たとと思われる。その結果が水位に現れ、上・中流部では平成25年の方が高く、下流部では平成16年の方が高く



図-7 平成25年と平成16年の洪水到達時間内雨量の差(平成25年値-平成16年値)



図-8 山腹崩壊発生目安の条件を満たす雨量観測所

つぎに、洪水継続時間について5mm/h以上の降雨継続時間を調べると、平成25年の方が5~6時間長い。そのために平成25年の洪水継続時間が長くなったと思われる。

(3) 微細土砂の流出について

氾濫水が引いた後の微細土砂の堆積状況をみると、平成16年の時は多く、平成25年は少なかった。また、平成16年の際には山腹崩壊があちこちで見られたが、平成25年の時はほとんど見られなかった。この堆積土砂の違いについて、両年の山腹崩壊の状況を雨量の面から調べてみた。芦田・江頭らの研究成果(「豪雨時の山腹崩壊に関する資料解析的研究」京大防災年報29号B12、

のは、堤防未整備区間が多く存在していたことによる。図-3は平成25年洪水の下流部の状況で、山から山までが川といった様子とともに、堤防未整備区間からの氾濫が知られる。両年の主要な浸水地域はほぼ同じで、図-4に模式的に示している。下流部の舞鶴市から中流部の綾部市にわたる川沿いの0km~45kmの広い範囲である。両年の被害状況も、

1986)によると、崩壊発生の目安は、最大時間雨量30mm以上、最大3時間雨量70mm以上、最大24時間雨量170mm以上の3つを満足する場合である。これを適用してみたのが図-8で、3条件を満足した観測所を示している。▲が平成16年、●が平成25年を示す。平成16年はほぼ流域全体で条件を満たしているのに対して、平成25年は上流域のみで満足している。このことから、平成16年の微細土砂の流出は多く、平成25年は少なかったと推察され、洪水後の微細土砂堆積の違いを説明できる。最後に、種々の資料を提供して頂いた国土交通省福知山河川国道事務所および京都府河川課に謝意を表します。

水都大阪と幻の大阪大国技館(8)

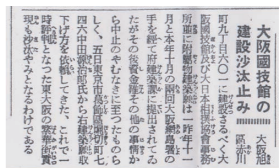
水都の会 城北川プロジェクト(代表 藤井 薫)



第1回大阪大場所から帰路につく人々(昭和12年6月)

東大阪の新繁華街?

関目の大国技館より前に、国技館の建設が計画され、地鎮祭まで挙行された旭区赤川町での建設計画が取りやめとなった際の新聞記事です。

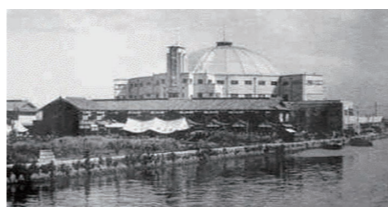


昭和7年12月6日付 大阪朝日新聞

昭和12年の大阪大国技館開館記念場所の風景です。結びの一番が終了。観客が家路につく姿を檜橋から見たものでしょうか。良く見ると人の波は、遙か遠くの城北川に架かる北葦橋まで延々と続いています。

最寄りの京阪関目駅まで普通に歩いて15分。ましてや2万5千人もの観客がぞろぞろと歩くわけで、時間がかかり大変だったことでしょう。しかし、終わってすぐ帰るのでは、観客は遠路はるばる来た甲斐がなく、地元にもメリットがありません。

観客輸送手段の整備に加え、街自体に相撲以外の何かの魅力付けが必要なのでしょうが、当時、大国技館の経営主体であり、街のデベロッパーでもあった旭土地興業(株)には良い方策はなかったのでしょうか。



大国技館前のお茶屋街の一部(手前)

本家など6軒の相撲茶屋が建ち並び、新たな商業ゾーンとして様々な整備が始まりつつありました。

「これで一時評判となった東大阪の繁華街実現も沙汰済みとなるわけである」と書かれています。「繁華街実現」とは何とも大仰ですが、関目でも同様に大国技館を中心とした東大阪の副都心ともなる「新繁華街」の開発が計画されていたようです。

事実、当時は大国技館に隣接し、式会社、現在の近鉄の略称です。つまり、この橋は桜ノ宮から四條畷に向かう新線を計画した大阪電気軌道(近鉄)が、昭和4年に着工したものの、建設中止となった幻の新線の遺産なのです。「近鉄沿線の阿倍野や難波ならわかるけど、どうして城東区に近鉄?」と思われるかもしれませんが、当時大軌(近鉄)は北河内でも事業意欲満々でした。

用地買収が終了し、橋も概ね完成したものの、なぜか中止になったこの新線が計画通り完成していたら、国技館周辺の新繁華街へのアクセスとして最も近い大喜橋の橋詰に駅が設けられたはずでした。

新繁華街とは少し離れています。京阪森小路駅やこの大軌新線の駅はいずれも城北運河沿いにあります。すから、もし運河の水運で繋がれば、京阪関目駅も含め3つの駅に囲まれた新繁華街は、申し分ないアクセスのある街になったはずでした。そして実は、その旅客需要も十分見込めた可能性があったのです。

繁華街(歓楽境) 成立の条件

日本の代表的な経済雑誌「ダイヤモンド」

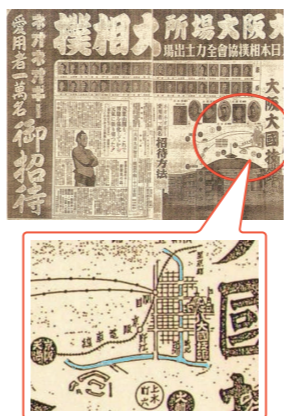
もつとも、旭土地興業(株)では、年間を通じ集客できるよう、菊人形やサーカス等の催物を行うよう努めていましたが、肝心の相撲は13日間の興行が年2場所あるだけでした。

これではキタやミナミに対抗する新繁華街「ヒガシ」を名乗るには、アクセスや街の吸引力において全く話になりませんが、それでも繁華街計画として評判となったのには何か余程の仕掛けがあったのでしょうか。

観客の輸送について

胃腸薬「ネオネオギー」の新聞広告です。愛用者1万名無料招待というこの太っ腹な薬品会社の広告によると、相撲興行時には観客は梅田や難波からバスでピストン輸送されていたようです。しかし、バスの乗客数は知れたもの。大国技館を満杯にするのに力不足は否めません。

更に広告の挿絵を良く見ると、大国技館の脇を流れる城北運河が寝屋川



胃腸薬ネオネオギー新聞広告



経済雑誌ダイヤモンド(昭和12年3月21日)

「国技館中心の土地経営」と銘打って旭土地興業(株)が有望な新興企業として紹介されていたのです!

記事には「国技館の経営と催物が中心となって付近が新歓楽境となるに於ては、当社の所有地は一段の値上がりを果たす筋合いにあるが、最近、二業地、三業地実現の希望が濃厚してきた」と記載されています。

二業地とか三業地とは聞きなれない言葉ですが、いったい何のことなのでしょう。実はこれらは従来、繁華街(歓楽境)にとつて不可欠な存在と考えられていたものでした。

新たな都心計画とその後

江戸時代から戦前にかけて新興地に人を集める切り札とされていたのは、何といっても花街でした。三業地とは、料理屋・芸者置屋・待合の3種の営業が警察より許可されていた当時

川を通じ天満橋に繋がっています。そうです!城北運河沿いの大国技館なら、天満橋だけでなく難波からでも観客を直接船で大量に運べたはず。建設時には資材運搬に大いに貢献した城北運河ですが、観客輸送ではどうだったのでしょうか。

寝屋川の城東巡行船

明治期の大阪では、大阪巡行船(株)が運航する巡行船が市内の水路を縦横に繋ぎ、水都大阪ならではの重要な足となっていました。しかし市電との競争に敗れた巡行船は、大正2年に廃止されます。一方、寝屋川では、廃止された船を引継ぎ、大正3年に城東巡行船(株)が発足。天満橋から上流に向け、陸上と船上からの「かけあい」で有名な野崎参りなどで存在感を発揮してきました。

実は城東巡行船は、大国技館の建設主体の旭土地興業(株)が設立された昭和9年時点では、まだかろうじて運航されていました。つまり、大国技館の構想段階では、



寝屋川の城東巡行船

の俗称です。(2種のみ許可が二業地)もし大国技館周辺に花街ができていれば、今日の街の姿も様変わりしていたはず。濃熟とは微妙な言い回しですが、事業主か第三者が誘致を働き掛けていたものの警察許可が下りなかったのでしょうか。

その答えは今もって謎ですが、実は、この街の当初の計画自体にその答えがあったのかもしれない。なぜなら、区画整理の計画地に最初から信愛女学校(現在の信愛女学院)が組み込まれていたからです。将来、花街の誘致を目指そうとする場所に通常女学校が計画されることはありえません。少なくとも大国技館を誘致した葦之荘土地区画整理組合の組合長の



寺西圓治郎

寺西圓治郎は、当初から従来の常識から一線を画した近代的な街づくりを目指したのではないのでしょうか。

戦争勃発とともに相撲興行は次第に下火となり、戦後、建物も取り壊されたため、大国技館の存在は地元でも忘れ去られています。ましてや繁華街(副都心)計画があったことなどや忘却の彼方となってしまいました。(大国技館の謎、続きは次号で)



大国技館及び新繁華街周辺の鉄道と水路